

はじめに

卒後臨床研修必修化の前年にあたる2003年、沖縄で初期研修を始めた私が、「臨床現場で一体何を学べばよいのかわからない！」と宮城征四郎先生(群星沖縄臨床研修センター長)に質問した答えは以下であった。

「君はバイタルサインを極めなさい、そして、それを伝えられるようになりなさい」

それまでろくに勉強もせず、何とか医師国家試験をパスした当時の私にとって“バイタルサイン”という言葉はただ新鮮なだけで、その意味すらわからなかった。それでも、わからないなりにレクチャーをすべて自筆で書きだし、翌日から救急外来や病棟での患者診療に利用し始めたことを今でも鮮明に覚えている。

臨床研修必修化では、病歴と身体所見を重視する傾向がある。その流れもあり、病歴のテキストや身体所見のテキストが出版され、実地診療や教育に利用されている。

しかし、バイタルサイン自体は身体所見の一部として記載されてはいても、実際の考え方などを示した書籍を見ることはいまだない。そして実地臨床においてもバイタルサインの生理学的解釈法は、その重要性を重々承知しているにもかかわらず軽視されている。おそらくその根源はバイタルサインの何を、どのように学べばよいのか、わからないことが原因ではないだろうか。

本書は宮城征四郎先生の著作である「生命徴候の臨床的意義」〔呼吸, 28(10): 1051-1053, 2009〕を拡大・改変したものである。当初は卒後臨床研修プロジェクト群星沖縄の研修医を対象として作成したものであるが、現場看護師・救急救命士からの強い要望もあり、バイタルサインという診療ツールを日本で医療に携わる誰もが利用できるようにと考え、今回の出版に至った次第である。

本書では、バイタルサインの生理学的解釈を通して患者マネジメントのヒントを紐解いていくことを主眼としている。奇抜な考え方ではなく、当たり前のことを当たり前に遂行することで患者を救っていくのが、本書で強調している先手必勝の医療であり、そのための核となるのがバイタルサインである。

ここで学ぶ知識が現場医療、ひいては日本の医療に少なからず良い影響を与えるようになることを切に望んでいる。

< 本書の使い方 >

本書は大きく分けて総論・各論と練習症例に分けられる。

Part 1が総論・各論であり、ここではバイタルサインの生理学的解釈に必要な原則を記述している。可能な限りフローチャートなどを用いて、理解しやすさを追求したつもりである。

Part 2の練習症例については、可能な限り多くの症例を呈示した。すべて実在の症例であり、特に典型的なものを紹介している。また、バイタルサインの生理学的解釈に際しての重要なポイントを記述しており、いずれも現場の臨床で役立つものと確信している。

無論、臨床現場では典型例のみならず、非典型例も経験を積むにつれてその病態把握ができるようになってくる。多くの症例を経験し、疑問を抱き、毎日その疑問点を解決することで、臨床技能は身につくものである。したがって、本書を読んだその日から、飛躍的に臨床能力が向上するわけではない。

しかし、バイタルサインの生理学的解釈を実地臨床において反復すれば、必ず今まで見えていなかった病態が見えてくるものと信じている。

最初は一見退屈に見える作業でも、一つ一つを丁寧にくり返すことで、ある変化に気づくはずである。その変化とは、

- ・患者を診る姿勢が変わる
- ・今から起こりうる病態を予測できるようになる
- ・患者により良い医療を提供できるようになる

などである。

Only those who have the patience to do simple things perfectly ever acquire the skill to do difficult things easily.

単純なことを完璧にこなした人だけが、難しいことを簡単にこなす技術を身につけることができる。

– Johann C. F. von Schiller (1759～1805)

< 謝 辞 >

本書を作成するにあたり、非常に多くの方々のおかげでできた。本書作成当初より最後まで力を振り絞ってくださった羊土社 保坂早苗氏、この原稿を書くきっかけとなった浦添総合病院の同僚たち、作成途中の原稿に対して貴重な助言をいただいた伊波朋香氏、加治工選江氏、宮里朝矩氏、何より私のようなお世辞にも優秀とは言えない医学徒を現在も御指導くださっている宮城征四郎先生に、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

最後に、妻 和子と本書執筆中に3人に増えた子供達には、稿を進める間応援し続けてくれて本当に感謝している。

2011年3月吉日

大浜第一病院 救急総合診療科 立ち上げ1周年とともに

入江聡五郎